

会報

有田史談会
事務局
佐賀県西松浦郡有田町上幸平 1-8-5
TEL 0955-42-2466
HP arita-sidankai.sub.jp/
✉ arita-sidankai@hotmail.com

大橋康二先生の特別講座を連続で開催!

本年度も大橋康二先生（県立九州陶磁文化館名誉顧問）による年4回の特別講座を開催した。

第1回目の講座は「やきものの見方」、9月25日九州陶磁文化館研修室にて、昨年同様に陶片に触れながら材料・成形・装飾法・窯詰め法の視点から判別するやきもの見極め方を楽しく学習した。

第2回目の講座は11月13日「肥前磁器の海外輸出」と題して、海を渡った古伊万里の誕生から輸出に至るまでの時代背景やその状況など、今回は主に第一次輸出時代の17世紀後半から18世紀半ばの海外輸出の詳細をスライドを見ながら学習した。

第3回目は12月11日「日本の色絵磁器の創始と発展」の表題で講座を開催した。特に有田山辺田遺跡から赤絵窯が発見され、色絵磁器が大量に出土したことを契機に、有田の技術がどのような背景で石川県に伝播していくこと

になったのか、より内容の濃い学習となった。

第4回目は1月24日「鍋島と禁裏御用磁器」の講座を開催、將軍家へ献上した鍋島についての、さらには民窯の辻家の焼き物がどのような背景で宮中に納められるようになったかなど、鍋島焼製品と禁裏御用品との関係や違いなど、その背景や経緯についても詳しく学ぶ講座となった。

1月度の講座をもって本年度の全講座が終了した。なお、2回目以降の講座は、生涯学習センター会議室にて開催した。



有田男に伊万里女

栗山慎悟

「〇〇男に〇〇女」、よく耳にする言葉である。有田と伊万里にも、「有田男に伊万里女」という言葉がある。「有田の男は良か男、伊万里の女は良か女」「亭主にするなら有田の男、嫁にするなら伊万里の女」という意味に捉えられている。

江戸時代、有田で焼かれた磁器は、最高の技術を有し国内外で高い評価を得た。よって、鍋島藩は磁器の製造技術が他所に漏れないように、有田の出入りを厳しく監視したので、伊万里の商人が有田へ買い付けに来ることなどありえず、有田の住人と伊万里の人が出会う機会は殆どなかったであろう。

しかし、有田から伊万里へ行くことが出来る人たちがいた。荷担い人（にやーにん）である。有田で焼かれた焼き物は、荷担い人によって伊万里の問屋に運ばれた。荷担い人による運搬は、炎天下・風・雨・雪の日を問わず運ばれた。

女性が結婚相手を選ぶ条件は、体が丈夫であること、健康であること、そして良く働くことであろう。重い焼き物を担い、伊万里まで運んでくる荷担い人は、三つの条件に合致する。有田男とは、荷担い人のことではないだろうか。

また、炎天下・豪雪の日に焼き物を運んでくる荷担い人に、咽喉を潤すための水やお湯、体を拭き足を洗うための水や湯で労ってくれるのは、伊万里の問屋で働く女性たちで、「伊万里女」と言われるようになったのではないだ

ろうか。明治三十年（一八九七）有田駅が開設されると荷担い人の仕事も終えることとなった。

「有田は食道楽、伊万里は着道楽」という言葉もある。有田は食事に金を使い、伊万里は衣服にお金を使うという意味である。有田は磁器の生産地であり、磁器の生産には体力を使うため食事に金を使う。伊万里は有田の磁器を扱う商業地であるため、衣服が汚れることもなく、いつもきれいな服を着ているという意味であろう。

「有田男に伊万里女」「有田は食道楽、伊万里は着道楽」の由来については、諸説あるであろうし、いつ頃からなぜ言われ出したのか知ることは出来ないが、有田と伊万里の関係が深かったことを物語るものであろう。



古物の誘惑

山口信行

私は古いものが好きだ。何でもかんでも古いものが好きというわけでもないんだが、例えば新しくノートを買うとしたら、それでも例えば、表紙は一昔前に流行ったようなデザインのもの

「幕末明治有田の豪商」鑑賞!

昨年は明治維新から150年目にあたり、県内では明治維新150年記念のイベントが開催されたが、この期間中、九州陶磁文化館にて、再び世界へ「幕末明治有田の豪商」―蔵春亭と肥礫山信甫―のテーマ展が開催され、8月9日山本学芸員の案内で研修した。

蔵春亭（久富家）と肥礫山信甫（田代家）は幕末から明治にかけて海外に進出した有田の豪商として知られ、今回の展覧会では当時の作品が多数出品され、幕末明治期の有田焼ブランドに改めて驚きと感動で作品を鑑賞した。



山本学芸員の解説を真剣に聞き作品に見入る会員。

企画展「古武雄」鑑賞!

九州陶磁文化館の秋の企画展では、人間国宝の故中島宏氏が寄贈された約600点の「古武雄―こだけお―」の作品の中から選りすぐりの逸品が展示されるのを機に、藤原学芸員の案内で鑑賞した。

「古武雄」は江戸時代前期（一七世紀前半）から一九世紀にかけて佐賀藩武雄領内で生産された陶器で、中でも、褐色の素地に白い化粧土を施し、鉄絵具で松樹文を線描きし緑釉で彩色した作品は大胆で魅了した。また、緑と褐色の釉薬をひしやくでかけた作品や、象嵌技法の作品など大胆さや精密さをもった作品を鑑賞することができた。



平成30年度活動報告

- 4月 例会（生涯学習センター）
- 5月 文化講演会（生涯学習センター）
- 6月 例会（生涯学習センター）
- 7月 例会（生涯学習センター）
- 8月 例会・テーマ展鑑賞
「幕末明治有田の豪商」
- 9月 例会・第1回講座（同上会議室）
「やきものの見方」
- 10月 例会・企画展「古武雄」鑑賞
- 11月 例会・第2回講座（同上会議室）
「肥前磁器の海外輸出」
- 12月 例会・第3回講座（同上会議室）
「日本の色絵の創始と発展」
- 1月 例会&食事会（まるいし）
第4回講座（同上会議室）
「鍋島と禁裏御用磁器」
- 2月 例会（生涯学習センター） 予定
- 3月 例会（生涯学習センター） 予定

※本年度1月の例会&食事会には大橋先生にもお忙しい中をご参加頂き、楽しいひと時を過ごすことが出来ました。ありがとうございました。

を購入する。

二十歳前後の頃、陶器市に行ったんだが、無意識の内に薄汚れたような徳利なんかを持ち帰っていた。その頃、自分に古物愛好の意識は全くなく、確実に自分は古物が好きと分かったのは、恥ずかしながら、「世界焔の博覧会」が有田であった後からである。

焼物といえば有田焼しか知らなかった自分が、博覧会で全国から集められた様々な種類の焼物を見て腰を抜かした。焼物とはこれほど多種多岐にわたっているのかと。

中でも最初は備前焼の魅力にとりつかれ、そのふるさと岡山県伊部まで出かけ焼物を求めたりした。地元では、素朴な唐津焼、それも古唐津と呼ばれるもの、古伊万里、初期伊万里と呼ばれる江戸期の有田焼へと興味は広がっていった。そこに至ってフト思った。

あ、自分は古いものが好きなんだ!、と。三十代も終わりの遅すぎる自覚があった。そこから私の骨董遍歴が始まった。

古いものに目覚めた私が、自然に骨董屋さんに向かうに、そう時間は要さなかった。骨董屋さんの中では、特に九州の骨董屋さんでは、何といても古伊万里（江戸期の有田焼）がメインの場所を占め鎮座して、他の地域の焼物も幾つか見られるが数は少ない。ただ、他の地域の焼物も、例の博覧会以降の「勉強」で少しは分かるようになっていたので退屈はしなかった。古いものの魅力がやはり私を引き付けるのである。確かその頃だったか、各地の骨董屋さんを図録で紹介した書籍

が出版されていて、それは大いに参考になった。

「勉強」と云えば、特に古伊万里に関して、何といても九州陶磁文化館（九陶）の古陶磁は素晴らしい。特に、寄贈頂いている途中だった柴田夫妻コレクションは、時代毎の製造年代まで表示され、特徴がよく分かり本当に勉強になった。一連の図録を購入したのは云うまでもない。途中から特別展以外は九陶の入場も無料になり、なおさら気軽に利用出来るようになった。

ところが、良いこと悪しき事は表裏一体の関係でもある。例えば、骨董店で実物を見て触り、九陶で本物の古伊万里を見聞し、図録でも確め自信も深めて、たまたまそんな時に自由な金があったとしよう。そしてそんな時に向かうところ敵なしの面持ちで古伊万里を求めに出かけたとしよう。そこで待っているのは、贋物（がんぶつ、にせもの）をつかむという、やつかいで残酷なものの存在でもあった。



1700年代初期の古伊万里

異人館建設当時

馬場正明

明治九年は、有田異人館が建設された年です。異人館を案内するとき、単に「今から百四十年前」というだけでは何か物足りなく感じられ、この頃の世の中の状況はどのようなものであったか、当時の年表を捲りました。

明治九年三月の廃刀令（軍人・警察や大礼服着用者以外の帯刀を禁止した法令）や、八月の金禄公債証書発行条例（華族や士族に支給された禄を強制的に取り上げ、期限付きで僅かな利子しか受け取れない公債に切り替える政策）などに不満を持つ旧武士が十月に相次いで熊本、秋月、萩で新風連の乱、秋月の乱、萩の乱を起し、更に翌十年には西南戦争が起る不穏な年でした。

一方、以後の人々に永く大きな影響を与える制度上の改革も行われ定着していききました。

ひとつは暦、それまで月の満ち欠けと太陽の運行状況を加味し補正して日付を決めていた「太陰太陽暦」を西洋で使われていた「太陽暦」に替えました。（明治五年十二月三日を明治六年一月一日に変更）その暦も定着した明治九年四月一日より日曜日を休日、土曜日を半休（所謂『半ドン』）とすることに成り、その結果 四月二日は日曜で休み、翌三日は神武祭の祭日で休みであるため、初めての連休となりました。

もうひとつは秤・尺等の長さや長さの単位に関連、明治八年五月にメートル・キログラムの原器が更新されそれを機にフランスはじめ十七カ国間でメートル条約が締結されました。ただ日本ではその年の八月に尺貫法が制定され、やっと全国的な度量衡の統一がなされ、明治十八年メートル条約加盟国となりました。

更に、もうひとつは貨幣、明治四年五月それまでの両分・朱の基本単位『両』が円・銭・厘の基本単位『円』に代わりました。ちなみに明治七年当時の物価は店売り諸相場で上白米一升十銭五厘二毛、上酒一升二十銭、上醤油一升一八銭、油一升二十四銭など。ただ当時の戦乱で戦費を補うため紙幣が増発され明治十年頃から物価が高騰して明治十四年頃には米価が二倍にもなったと記録されています。

これまで有田異人館は佐賀県の重要文化財に指定されていましたが、昨年末に「旧田代家西洋館」として国の重要文化財に指定されました。



ル・キログラムの原器が更新されそれを機にフランスはじめ十七カ国間でメートル条約が締結されました。ただ日本ではその年の八月に尺貫法が制定され、やっと全国的な度量衡の統一がなされ、明治十八年メートル条約加盟国となりました。

更に、もうひとつは貨幣、明治四年五月それまでの両分・朱の基本単位『両』が円・銭・厘の基本単位『円』に代わりました。ちなみに明治七年当時の物価は店売り諸相場で上白米一升十銭五厘二毛、上酒一升二十銭、上醤油一升一八銭、油一升二十四銭など。ただ当時の戦乱で戦費を補うため紙幣が増発され明治十年頃から物価が高騰して明治十四年頃には米価が二倍にもなったと記録されています。

これまで有田異人館は佐賀県の重要文化財に指定されていましたが、昨年末に「旧田代家西洋館」として国の重要文化財に指定されました。

大神宮に登る！

中村貞光

有田内山の南側には標高350mの蓮花石山がある。地元では大神宮と呼んでいるが、一度も登ったことがなく眺めて育った。幼い頃は山の名前からして「神が宿る山」だと勝手に思い込み、登ることを躊躇してきた。

赤絵町の郵便局横の金比羅社を起点に約1時間の山登りだ。今回は初めてのこともあり、馬場さんに同行をお願いした。金比羅社の鳥居をくぐり、登山を開始すると間もなく、昨年の大雨で土砂崩れを起こした法元寺の裏側斜面の上側を通り抜けた。登り始めはやや余裕もあったが、道のりは緩やかな傾斜とはいえず、頂上まで登りが続く。息切れで何度も休憩を取り、頂上を目指した。

30分もすると眺望が開け、眼下に有田内山の町並みが見えてきた。陶山神社や陶祖李三平碑も上からの眺めは格別だ。さらに登ると、白川の奥に有田ダムも見えてきた。中々の眺めに疲れが癒される。

大神宮の頂上には、戦時中に作られたのだろう敵機監視用と思われる防空壕が残っていた。さらにNHK佐賀放送局と地元サガテレビの電波塔が立っている。周囲は樹木が伸び放題で、頂上からの眺めは良くない。

電波塔の中央には天照皇大神宮の碑が祭られていて、山の名称の由来があるようだ。



蓮花石山の頂上にある石碑の下には折有田町繁栄の文字が

碑の裏面中央には「皇太子殿下御生誕記念再建之」とあり、右側には「奉祀年次雖不詳有天正十年記録之石燈籠為」、左側には「昭和九年吉日辰」と刻まれていて、文禄以前に石の燈籠があったとも解せる。

大神宮から望む眼下の谷間に広がる有田内山は、今から約400年前に朝鮮から連れてこられた陶工により磁器の原料である陶石が発見され、日本で初めて磁器が焼かれて今日の有田が誕生した。白川天狗谷で登り窯が築かれ、磁器生産の技術は半世紀も経たぬうちに進歩を遂げると、17世紀後半から海外輸出が始まった。この狭い谷間で焼かれた焼き物は、日本全国はもとより遠路海外にまで運ばれ、伊万里焼の名で世界を席巻してきた。

時代の変遷に翻弄されながらも、磁器発祥の地として伝統を守り生き抜いてきた有田の歴史を、大神宮は見守り続けてきた。

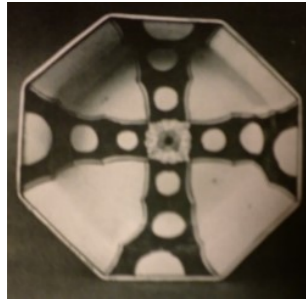
頂上からは東側に御船山が、天候に恵まれれば南西側に大村湾も見えようだ。

有田白キリシタン(1)の私的考察

鶴 美百合

昭和48年発行の「日本の絵皿」という本に巡り合ったときは、思わず「やっ！」と興奮しました。なぜなら、私がクロス(十字)・バカ(クレイジ)だからです。とても珍しいクロス(皿)が、有田で焼かれたものとはつきり書いてあるので、この皿の持ち主の解説を紹介したいと思います。

「このクロス(皿)は、島原、妙高寺の和尚に頂いた皿であるが、町の道具屋で見つけ、わざわざ私のためにとって置いてくださったものである。もうすまでもなく、島原は昔キリシタン戦争のあったところで、こんな雑器が町屋から出たということだけでも、私にとっては、なつかしいし、有田の窯で禁制になっていたキリシタンのために、こんな絵付けの皿が作られたということを知ったのも嬉しい。これなど、絵付けとして美術価値があるというのではないが、日本におけるキリスト教文化の上からみれば、貴重な資料と言わざるをえない。ある意味では、日本の文化の歩みの中の生きた資料といわなければならぬ」



最近の私の関心事のテーマは、有田山と私の関心を調べることに夢中です。

さて、もう一つ栗田美術館所蔵の本にある衝撃的なクロスを紹介したいと思います。「鍋島染付隠れキリシタン山水図大皿」高さ73cm直径30cm元禄時代(1688~1703年)

「鍋島藩窯で十字文の入った大皿が制作されたということは、全く信じられない。然しこの皿は事実を雄弁に物語っている。九州地方の切支丹弾圧を遁れて、この皿を隠しもった信者は下総(千葉県北部)に安住の地を求めた。更にこの皿について、古文書が発見され、数奇な運命を知る事ができた。左方の屋根下に十字文、網を高くした竿頭(明らかな十字文をみる事ができる。これと図様の同じ大皿が先年ドイツで発見されたが十字文はない。鍋島藩窯の十字文大皿として歴史的貴重な作品である」



二年前に肥前浜町を訪れ、聞き取りをしてみると、太良街道にはキリシタンの遺跡が多く残っていることが解りました。また、肥前キリシタン研究会史を見ると、鍋島勝茂公と鍋島藩窯の事が記されていました。

『老いの整理学』を読んで

久富桃太郎

ピグマリオン効果

日本人は、ほかの国に比べて元気がないそうです。「自分に満足している」と答えた人がアメリカが86%、日本は68%でした。たしかに学校でも、叱ることがあっても寝られないですね。高齢者になると褒められることはまずないですね。

北欧州で「老人はいつ死ぬか」を調査しました。結果は、誕生日の1カ月前くらいから死亡率が低下して、当日は最低になるようです。誕生日が過ぎると、また急上昇するそうです。つまり、誕生日は褒められる日だからです。ある老人に、「あなたは今度受賞さ

れるそうですよ」と伝えました。病気がちのその人が「エッ！そうですか」それから元気になられたそうです。家族も構ってあげてください。竹馬の友も褒めてはくれませんか。楽々会のようなところで、おしゃべりをしたほうが面白いのです。話を聞いて「我を忘れ、時を忘れ、自分はまんざらではない」と思うと、不思議に力が湧いてきます。褒められれば、大抵の老人は、歳を忘れ、我を忘れて新鮮になります。人を生かすのは、ホメてくれる友を作ることです。

※楽々会：3区の老人会

大人多忙 小人閑居

アメリカでは、中高年の男が妻に先立たれると短命になると言われています。今までの食事を妻が作っていたのを、自分が作らないといけません。「面倒だ！」「いまさら台所に立てますか」そして三度とも外食にしました。

この本を書いた外山さんの奥さんが大腰骨骨折で歩行困難になりました。それで外山さんは、自分でやってみようと決めました。今は恵まれている。欲しい食材はすぐ手に入る「やろう」と考えました。

まず朝飯は味噌汁は面倒だからサンドイッチにして、トマト・ハム・卵焼き、それにバナナとかシューナッツと牛乳にしました。昼は「煮込みうどん」夕食はブリの照り焼きと味噌汁。時には鍋料理やチラシ寿司やすき焼きをしました。

楽しいですね。でも大変です。

白石・須古にまつわる話

井手邦男

私の母の実家は塩田町西山にあり、江戸時代からの窯元で、母はその窯元の娘だと聞いていました。第二次世界大戦前に2回の火災が起こり、窯元を辞めました。その後中国へ渡り、旅館を経営していましたが、日本が戦争に負けたため、引き上げ者として伊万里に帰ってきたそうです。そして井手家に嫁いできました。

母の実家の菩提寺は、須古にある『陽興寺』だと聞いていました。私が小さい頃は、そのお寺について行ったりしていましたが、陽興寺には須古鍋島家の御霊屋があって、須古鍋島家の墓が51基あります。母の実家の墓がなぜ陽興寺にあったかという、焼き物を鍋島家に収めていたことから、鍋島家の墓の下に墓地の用地をもらって墓を建てたそうです。私はそのような歴史的なことに何も関心を示すことなく60歳過ぎまで過ごしていました。

陽興寺は龍造寺隆信の母、慶閨尼(けいごんに)の菩提寺でありましたが、これまでそういった事を私は知らず、70歳を過ぎてから白石町に行き、陽興寺に立ち寄った際にヌイの池を見学しました。陽興寺の坊主さんから、寺の前に須古城があったことを聞き、地元の人達に城の場所や城にまつわる話を聞いて回りました。その後、須古城のシンポジウムの機会に恵まれ、参加しました。

須古城とは、「平井氏が守る難攻不落の須古城。龍造寺軍による、12年間

で4回に及ぶ須古城攻めで、ようやく陥落。隆信はその後、石垣、曲輪、濠などを整備し、須古城をさらに強固な要塞にして居城。ここを拠点に勢力を拡大し北部九州五か国(肥前、肥後、筑前、筑後、豊前)と二島(壱岐、対馬)を制覇。白石・須古城は当時、北部九州の実質的首都として機能していた。現在の遺構の大部分は隆信時代のものである。」佐賀県白石町 須古歴史振興会 説明書より引用

須古城といっても、白石町以外の方はほとんどの方が知らないようです。だから須古寿司は知っていても須古城は知られていないのです。

白石町にはいろいろな名所があります。皆さんもいろいろな場所に出かけてみてはいかがでしょう？

ちなみに須古寿司は、ムツゴロウを使った押し寿司で、藩政時代から今日まで白石町須古地区に伝わる郷土料理で、お祭りや祝いの席で振舞われているようです。



500年の歴史を持つ「須古寿司」

「ガラスの茶室」展を見て

伊良皆尚子

昨年11月28日より佐賀県立美術館に於いて展示されていた吉岡徳仁(とくじん)「ガラスの茶室」光庵を、2月2日に佐賀在住の幼馴染と一緒に行き、見に行くことが出来ました。2、3年前に改修された美術館は、床も壁もコンクリートで作られた近代的でお洒落な空間を作り出していました。テレビの宣伝では毎日数回この情報は報道されていました。が、「ガラスの茶室」が室内にどのような設置されているかを知りたいと、とても興味を覚えました。

会場に入るとすぐそこに設置されているガラスのテーブルに感動しました。広い空間には、自分の想像を超える凄く作品の数々に圧倒されました。会場では、設置されているガラスのベンチに二人で座り、幼少の頃の有田のことや、現在の有田のことなどとりとめもない話題に花が咲き、幼馴染と気ままに有田弁で盛り上がり、感動しました。

吉岡徳仁氏が佐賀出身で、有田工業高校卒業だと初めて知りました。また、デザインや建築、現代美術の領域で自然をテーマにした、世界的に活躍されている凄く人物だと知り、さらに感動しました。

幸いなことに私は有田に住み、史談会に参加したことで、毎月の例会

目からウロコ

吉永 登

九陶名誉顧問の大橋先生による特別講座は、毎回「目からウロコ」が落ちるような充実した内容でいつも楽しみに受講している。

その中からいくつか挙げてみると、まず第一回の「やきもの見方」では、考古学的な見地から判定される確かな眼力に圧倒された。さすがに何十万という肥前陶磁の陶片を年代順に調査分類されてきた、長年の研究の結果だと思ふ。

次に「有田磁器激動の四百年」では、中国の王朝交代の時期に多くの技術者が渡来し劇的な技術革新が起こり、色絵磁器の生産と海外市場の独占が実現したことを知らされた。

また、「世界に輸出された肥前磁器の全貌」では、17世紀後半から東南アジアからヨーロッパにかけての第一次輸出時代、さらに幕末から明治にかけての第二次輸出時代までをスライドを使って明快に解説され、壮大な海のシルクロードの全貌を知ることができた。

「日本の色絵磁器の創始と発展」では、山辺田遺跡の発掘調査により色絵の始まりが解明され、「古九谷II有田産」説に決定的な証明となったことなど興味尽きない講義であった。

最後に、「將軍家献上の鍋島と禁裏御用磁器」では、献上鍋島と禁裏御用磁器との違いを、スライドを使

や大橋先生の特別な講座を僅かな人数で学ぶことが出来る素晴らしい環境に恵まれています。有田の歴史、文化、自然などを知ることで、もっと知りたいとのポジティブな欲求にとても幸せを感じています。

ここ数十年で生活スタイルが大きく変わり、高齢化や少子化も進み、今は勢いを失った有田にいて、常日頃から強く思うことがあります。今偶然にも、この町に生まれ素直に成長している子供たちに、有田に生まれたことの特別な意味を伝え、有田であるからこそ出来る教育の在り方が、新しい町づくりにつながるのだと。有田を知りたい学びたいという教育の確立こそが、現在の有田に一番必要なことではないのかと感じています。

有田工業高校卒業の方々は、吉岡徳仁氏を始め様々な分野で沢山活躍されておられます。人口わずか2万人足らずの町に、工業高校や佐賀大学があり最高に恵まれた環境を有しています。

有田の子供たちには「伝えなければ続かない」ことの大切さを学び、もっと伸び伸びと楽しんで欲しいと願っています。



って年代順に説明され、歴史的な文献資料によって両者の相違を的確に知る初めての経験であった。今回の大橋先生の連続講義は、実に贅沢な知的興奮に満ちた経験であったことを心から嬉しく先生に感謝申し上げます。

編集後記

投稿が予想以上に増え、昨年まで4ページで作成した紙面は大幅に拡大することとなり、悪戦苦闘しながらも楽しく編集作業を行いました。

年に一度の「会報」発行は、年度末の活動報告の一環として、史談会の足跡を残す大切な行事だと思っています。一年の締め括りとして、会の活動報告のほか会員個々の研究発表や近況報告など掲載しています。が、会員の協力がなければ発行しても単なる活動報告だけになってしまいうだけに、皆様のご協力に心から感謝しています。



郷土に誇りを

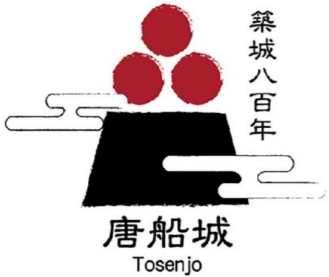
坂井勝也

唐船城築城800年記念事業実行委員会の実行委員の一人として、有田史談会より参加させていただきました。委員会になってすぐ、Kさんから、池田徳馬さんを紹介していただき、3人で唐船山を中心として、殿様墓、磨崖種子、城江井桶、記念碑等の案内をして頂きました。

平成30年10月13日には、第2回唐船山清掃ウォーキングに参加し、展望所にて佐藤昌三さんより、炎天下にもかかわらず、1時間にわたり唐船城にまつわるお話がありました。元寇(文永の役、弘安の役)の折も唐船城(松浦党)から出兵し蒙古軍と勇敢に戦ったとのこと。

3月22日には、奈良大学の千田教授を中心に藤泰治さんの案内で唐船城址現地調査に同行し、道なき道を歩く場面もあり、終わるころには足はふらふら、心臓は今にも止まりそうな状態でした。千田先生は、足も軽く、その夜行われた歓迎の宴でも、すごい飲みっぷりでした。その道のエリートはさすがだと関心致しました。24日には、炎の博記念堂で、千田教授の記念講演がありました。

また、8月8日には、唐船城跡イラスト復元のため町された富永先生の現地調査に同行することができ、いろいろ教わる事が多く、貴重な経験をさせていただきました。11月4日には、唐船城「特設ステージ」などで、プレイベントが行われました。歴代城主慰霊祭をはじめ、山海



築城八百年

唐船城 Tosenjo